

哲学の世界に触れてみよう

現代編

Index

哲学とは

「神は死んだ」 ニーチェ

20世紀最高の哲学書の著者 ハイデガー

人間は自由の刑に処せられている サルトル

哲学とは

そもそも、哲学とは何でしょうか。哲学は、難解なもののようにいわれることもありますが、実はそうでもありません。

フランスの数学者で哲学者でもあったパスカル（1623～1662年）の言葉に、「人間は考える葦（あし）である」があります。この言葉には、「人間は弱くはかない生き物の一つだが、人間には他の動物や植物にはない素晴らしい能力がある。それが『考える』力である」という意味が込められています。

哲学は、この言葉の通り、まさに人間の「考える」力を重視し、発展してきた学問といえるでしょう。哲学者たちは、私たちが「なんとなく」で済ませてしまう小さな疑問を、徹底して考えます。そのため、著名な哲学者たちが築いた哲学の中には、現代の私たちでもはっとするような含蓄のあるものがあります。

本稿では、「現代」の西洋哲学者とその思想についてまとめます。

なお、哲学者の思想については諸説ありますが、本稿では一般的な内容を紹介しています。

「神は死んだ」

ニーチェ

カントの後の哲学では、人間は神を知ることができないという「無神論」が展開されるようになりました。ニーチェ（1844～1900年）は、キリスト教、道徳、理性などの権威を非難し、既存の価値観の破壊を試みました。中でも最も激しく非難した既存の権威がキリスト教です。著書『悦ばしき知識』に記述された「神は死んだ」という宣言は、ニーチェの思想を表す代表的な言葉となり、その後の著書で代表作でもある『ツァラトゥストラはかく語りき』でも同様の表現が見られます。

あらゆる権威を否定し、唯一絶対の真理・真実などは存在せず、そこにあるのは一人ひとりの解釈のみであり、それが分かった後に私たちに訪れる虚無的な精神は「ニヒリズム」と呼ばれます。

ニーチェはよくニヒリズムの哲学者と思われがちですが、実際にはむしろニヒリズムを批判していると考えられます。人間は、自分が信じられる絶対の真理がなければ、どこか不安を感じがちです。しかし、だからといって過去の挫折から怨恨や憎悪（ルサンチマン）を抱え、自分自身を卑小な精神の持ち主だと考えて、宗教に頼り天国や来世を夢見る生き方では、いまを生きている人間のためにはなりません。だからこそ、いま現在を生きることを肯定できるよう、現実をとらえなおすことが必要だと、ニーチェは説いているのです。

サンプルレポート

本レポートは、サクセスネットで公開している
ビジネスレポートの一部を公開したサンプルです。
サクセスネットサイトにログインした後、全文を
閲覧することができます。